

# 中・上級学習者のための文語教育 —2002年度～2014年度文語コース履修者アンケート及び実践報告—

金山 泰子

## 【要旨】

本稿は、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの文語コースにおいて実施した2002年度から2014年度の受講者総計169名を対象としたアンケートの結果を報告する。アンケート質問事項は、専攻（研究テーマ）、研究における文語文法の必要性の有無、文語学習歴、文法用語の知識、古典の読書歴、コースで勉強したいこと、読んでみたい作品である。調査結果及び実践から二つの課題が浮かび上がってきた。第一に研究分野の多様化・細分化にどのように対応するか、第二に未習者を対象とした文語学習をいかにアプローチしやすいものにするか、という点である。これらの課題を踏まえた2014年度のクラスにおける実践を数例紹介する。

## 【キーワード】

文語の学習歴研究、分野の多様化・細分化、アプローチしやすい文語文法

## 1 はじめに

筆者は2001年度からアメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下センター）において文語コースを担当しており、2002年度より毎年コースの初日に受講者を対象に、背景・ニーズ調査アンケートを実施している。本稿では、アンケート調査の結果を集計することにより、どのような背景の学生にどのような文語学習が必要とされているのかを探り、中上級学習者を対象とした文語教育における課題について検討する。さらに2014年度のコースにおける実践を数例報告する。

## 2 コース及びアンケートの概要

センターでは、毎年第3、4学期（1月～5月）に選択授業として文語コースを開講している。授業は週1日100分で、全14～15回実施する。文語クラスの目的は文語文法の基礎を学ぶことであり、文法用語、歴史的仮名遣いから入り、動詞・形容詞・助動詞の学習に進み、コース半ばからは文法学習と並行して文語作品の読解を行う。表1は2014年度実施のスケジュールである。年度により進度や導入順序、読解で扱う作品に多少の違いがある。

受講者には文語未習者と既習者が混在しており、また専攻や履修理由も多様である。そこで、コース運営の効率化と向上を図るために、2002年度から2014年度にわたり、受講者を対象にアンケートを実施してきた(2005年度は未調査)。これまでの調査対象者総計は169名である。アンケートは記述式(一部選択式)で、質問事項は、専攻(研究テーマ)、研究のために文語文法が必要か、文語学習歴、文法用語の知識、古典の読書歴、コースで勉強したいこと、読んでみたい作品である。詳細は表2のアンケートシートを参照されたい。以下に調査結果の概要を述べる。

## 2-1 専攻(研究テーマ)

一口に「文語」と言っても、時代・分野によって文体・語彙・表記等、それぞれ特徴がある。本コースは基本的には文語文法の基礎を学ぶことを目的としているが、学生の研究テーマを把握しておくことは、教材の選択や例文の示し方、説明の仕方などを考える上で重要である。

表3に履修学生の専攻を示す。専攻分野は10項目に分類したが、研究テーマが決定しておらず複数分野を記入する学生や、研究テーマが複数分野にまたがる学生もいたため、複数分野にわたりカウントした場合もある。例えば「日本文学、中国思想」と書かれたものは「文学」と「哲学」の両分野に数えた。( )内に示した数字が実際のコース履修者数である。また年度を示す数字は、たとえば「02」の場合、2002年9月から2003年6月までの10週間4学期間を意味する。

全体の傾向を見ると歴史学専攻の学生が最も多く66名で全体の約35%、ついで文学が49名で約26%、宗教学が21名で約26%となっている。研究テーマについて特定の時代や作品、人物を記述した回答から時代別に見ていくと、歴史学においては近代が最も多く14名、ついで近世が11名、中世7名、現代5名、古代2名、中古1名となっている。さらに研究テーマを詳しくみていくと美術史専攻に特化している学生が16名と多く、全体の約26%を占めている。文学では現代がもっとも多く8名、近代が7名、近世4名、中世3名、中古1名、古代1名となっている。全体的として、近現代、近世を研究テーマとする学生が多いことがわかる。

## 2-2 文語文法の必要性

表4は研究において文語文法が必要であるかどうかについての回答結果を示したものである。なお、2002年度の初回アンケートではこの質問項目を設けていなかったため、未調査となっている。

必要と答えた学生が全体の約61%、不要と答えた学生が約37%となっている。「わからない」という回答は「不要」としてカウントした。約4割の学生が「不要」としながらも履修しており、履修の理由として「必要はないが役には立つと思う」「研究上の必要とい

うよい日本語をより詳しく理解したい」「必要かどうか分からないがやってみたい」「これから必要になるかもしれない」「必要ではないが翻訳者を目指しているので役に立つと思う」「今は現代史が専門だが明治時代にも興味があるので」「個人的な興味」「必要というより便利」「単語の知識を増やしたい」などのコメントが見られた。これらのコメントから、学生たちが研究に直結するツールとしての文法という観点だけでなく、時代や専攻分野を超えた文語の有用性や将来的な研究の可能性を考えて履修していることが見てとれる。

### 2-3 文語学習歴

表5は、履修学生の文語文法の学習経験について示したものである。未習の学生が102名と全体の約60%を占めており、ついで1年が21名(約12%)、1学期が18名(約10%)となっている。本コースは文語文法の入門コースであるため、初心者が多く履修することはあらかじめ予測されているが、約4割の既習者が履修していることも興味深い点である。既習者からは「習ったがほとんど忘れてしまった」「基礎から復習したい」「文語作品の読解力を身につけたい」「自信をつけたい」などのコメントがあった。

### 2-4 文法用語の既習状況

表6は、文法用語の既習状況について示したものである。現代日本語で使用される文法用語は、教育機関やテキストによって異なる。アンケートでは、活用の種類を表す用語(五段、上一段、下一段、サ変、カ変など)、活用形を表す用語(未然・連用・終止・連体・已然・命令形)の既習の有無について調査した。結果は、既習の学生が98名(約58%)、未習または無回答の学生が71名(約42%)であった。

約6割の学生が既習であることがわかった。しかし既習者の中には「五段動詞という用語や未然形という用語は知っているが、なぜそう呼ばれるかまでは知らなかった」という学生もいた。文法用語の知識は文法の理解を助ける上で非常に有用であり、また文法用語の統一を図ることはクラス活動を円滑に運ぶためにも重要である。本コースでは初日に用語を紹介し、覚えるように指示している。その際、ただ単に用語を紹介するだけでなく、なぜそのような用語なのかについても説明した。

### 2-5 古典の読書歴

表7は古典の読書歴を示したものである。古典の読書歴については、原文での読書歴がある学生が81名(約48%)、翻訳での読書歴がある学生が11名(約6.5%)であり、読書経験の無い学生が77名(約45.5%)であった。半数以上の学生が何らかの形で古典に接する機会に触れていたことがわかる。

特に多く読まれている作品は、「源氏物語」(29名)、「竹取物語」(25名)、「平家

物語」(23名)、「方丈記」(15名)、「古今和歌集」「新古今和歌集」などの和歌(15名)、「伊勢物語」(13名)であり、中古の物語が多く読まれていることがわかった。

## 2-6 コースで勉強したいこと、読みたい作品など

本コースは文語入門コースであるため、学生たちの希望の多くは「文語文法の基礎を学びたい」というものであった。したがって読みたい作品については「どんなものでも」といった回答や無回答が多かったが、特定の時代や作品、著者を記述した回答を時代別に見ると、最も多いのが近代で27名、次いで近世が21名、中世5名、中古4名となっており、近代、中でも明治時代の作品が多いということが顕著な傾向として見られた。

## 3 考察

以上の調査結果及び実践から浮かび上がってきた二つの課題について検討したい。一つは研究分野の多様化・細分化にどのように対応するか、ということである。もう一つは、未習者を対象とした文語学習をいかにアプローチしやすいものにするか、という点である。以下では上記の課題について、コースにおける実践を紹介しつつ検討し、今後の文語教育のあり方について考察する。

### 3-1 専門分野の多様化・細分化への対応

表1で示したように、履修学生の専門分野は多岐にわたっている。2014年度履修学生10名の専門分野を紹介すると、「美術史(雪舟)、室町時代の絵画・水墨画」「現代日本文学」「大衆文化で描写されるゲイについて」「演劇と政治」「近世日本とヨーロッパの交流・キリシタン文化、南蛮貿易時代」「宗教、教育、仏教大学の成立」「近世史(徳川将軍家の儀礼と政治的役割)」「日本史(大正時代)、優生学」「宗教(仏教)」「近代史」となっており、分野も時代も多岐にわたっていることがわかる。

また2-5にあるとおり、読書歴では中世・中古の物語系が多いが、実際の専門分野や読みたい作品については、2-1、2-6で示したように近代・近世が多くなっており、現実の需要との乖離が見られる。「竹取物語」「源氏物語」「平家物語」など中世・中古の物語が比較的多く読まれてきた背景には、翻訳も含めて認知度・普及度の高さがあり、知識・教養として代表的な古典を読んでおこうという意識があるだろう。一方で、専門分野や読みたい作品として近代・近世が多く挙げられているのは、これらの時代の作品が、いわゆる「古典」としては認知度・普及度が低いため、学習の機会が少ないということがあるだろう。同時に認知度・普及度が低いからこそ、研究対象としての価値が高いと言える。

このような現状を踏まえて、学生の要望に対応しながらできるだけ幅広いジャンルの教材をカバーするように心がける必要がある。特にニーズの多い近世・近代の作品を積極的

に文語の教材として取り入れることも意識したい。

本コースではこれまでも学生の要望も反映させつつ、近代作品では「舞姫」（森鷗外）のほか広告、新聞記事、公文書など、近世作品では「仁勢物語」「曾根崎心中」（近松門左衛門）「好色一代男」（井原西鶴）「雨月物語」（上田秋成）などを扱ってきた。

例えば「仁勢物語」は「伊勢物語」のパロディーとして書かれた江戸時代の戯作であるが、二つの作品を並べて読むことで、文法学習に留まらず、時代背景の違い、物語と戯作の違い、時代によって「旅」の概念がどのように異なるかなど、文化的な学びが得られるという利点があった。一方で、近松のような浄瑠璃作品を扱う場合、文法学習よりも語彙や分化的背景の理解が中心になり、文化的な学びはあるものの、基礎的な文語文法の習得を目的としたクラスでは適切とは言えない部分もあった。語彙や文体などがあまりにも時代や分野の専門性に偏り過ぎないようにすることに留意して教材を選択する必要がある。

### 3-2 未習者のためのアプローチしやすい文語学習とは—2014年度の実践

表5が示すように履修者の6割は文語が未習である。研究のために必要と思いながらも未習のまま来てしまった学生が多く、また履修者以外にも、とりたいけれど自信がない、難しそうだと敬遠する学生がいたかもしれない。文語文法を指導する者の役割の一つは、文語文法をアプローチしやすいものにするということである。その工夫の一つとして、2014年度のコースで実践した試案を紹介する。

2014年度は未習者が10名中8名と多かったこともあり、例年よりも「入門」ということを強く意識し、「文語に対する恐怖感・違和感をなくす」「文語を身近なものとしてとらえ、文語学習のハードルを低くする」という目標を設定した。この目標を達成するための工夫の一つとして、毎回クラス開始時に復習のための活用クイズと練習問題を実施することにした。

表8、9は2つの練習問題の例である。例1は形容詞の練習問題で、この時点では助動詞は導入していない。例2は「き・けり」の練習問題で、この時点で動詞・形容詞・形容動詞・助動詞「ず」は既習である。本稿では横書きとなっているが、実際には縦書きでA4サイズのプリントを使用した。

練習問題の作成にあたっては、「日常的な感覚と密接させる」「過去の言葉ではなく生きた言葉としての文語を意識させる」「読む言葉ではなく話す言葉として文語を意識させる」ということを意識した。つまり「日常的なコンテキストで例文を作る」ということである。これまでは、古典の原文を例文とした練習問題を作成していたが、本年度は、表8、9で示したように、まず日常的なコンテキストの中で口語の感覚を意識した文語の例文を提示して練習した上で、原文を例文とした練習問題に取り組む、という形で段階的に理解を深めるという形を取り入れた。

こうした工夫が実際に文語の力をつけることに直結したかどうかは、現段階では検証す

ることはできないが、学生からの質問が「この文語はどういう意味ですか」というものから、「こういう場合に、文語ではこのように言えますか」という形に変化してきた、つまり「文語⇒現代語訳」ではなく「現代語（コンテキスト）⇒文語」という意識の変化が見られたことは興味深いことであった。

現代において文語は「読まれる」ものとして存在しているが、もともとは「話される」もの、身体から発されるものであった。その身体感覚をわずかながらも意識することが、文語理解の一助になることを期待して、今後も学生の反応を観察しつつ試案を重ねたい。

#### 4 おわりに—今後の課題

以上、アンケート結果の報告と共に、結果から浮かび上がってきた二つの課題について試案を紹介しつつ述べてきた。

世界的にも学際的研究が広がる傾向のなかで、専門分野は今後さらに多様化・細分化していくことが予測される。こうした現状への対応を念頭におきつつ、限られた時間や学生のレベルに配慮し、できる限り広範囲にわたる文献・作品を扱っていきたい。しかしながら、文語コースだけでは対応できることに限りがある。3-1で述べたように、あまりにも専門性の高い文体や語彙で書かれた文献を文語コースの教材として扱うことは適切ではない。個々の学生の状況に応じたきめ細かい指導のためには、他コース教員や個別指導担当教員との連携、専門家との連携など、教育機関内外における連携を充実させ、相互補完できるようなネットワークの構築を図ることが必要であろう。

文語文法をアプローチしやすいものにする工夫は今後も試案を重ねて検討していきたい。現在日本語学習者の中で文語を必要としている学生は、全体的には多いとは言えないが、文語を近づきやすく親しみやすいものにするにより、文語を学習する学生が増え、それが研究の可能性の広がり、ひいては日本研究の発展にもつながっていくことを期待して、コースの改善に取り組みたい。

#### 謝辞

本稿は、沖縄県日本語教育研究会第12回大会における発表の一部に加筆したものです。発表の機会を与えてくださいました沖縄日本語研究会の皆様にご礼申し上げます。

表1 2014年度 文語コーススケジュール

## 第3学期

	月日	授業内容
1	1月15日	コース説明・アンケート記入 用語・仮名遣い
2	1月22日	形容詞・形容動詞
3	1月29日	動詞
4	2月5日	助動詞① 打ち消し「ず」
5	2月12日	助動詞② 過去「き」「けり」
6	2月19日	助動詞③ 完了「ぬ」「つ」「たり」「り」
7	2月26日	助動詞④ 推量「む」 係り結び

## 第4学期

	月日	授業内容
8	3月26日	助動詞⑤ 推量・意志「べし」 宇治拾遺物語 第101話「信濃国の聖の事」
9	4月2日	助動詞⑥ 打消し推量・打消し意志「じ」「まじ」 今昔物語集 巻29第18話「羅生門」
10	4月9日	助動詞⑦ 現在推量「らむ」 過去推量「けむ」
11	4月23日	助動詞⑧ 推定「らし」「めり」 助動詞⑨ 伝聞「なり」断定「なり」 雨月物語 巻2「浅茅が宿」①
12	5月7日	助動詞⑩ 自発・可能・受身・尊敬「る」「らる」 雨月物語 巻2「浅茅が宿」②
13	5月14日	助動詞⑪ 使役・尊敬「す」「さす」「しむ」
14	5月21日	助動詞⑫ 半実仮想「まし」 願望「たし」「まほし」

表2 アンケート

文語クラスアンケート

1 名前：

2 専攻（研究テーマ）：

3 研究のために、文語文法の知識が必要ですか。

4 今までに文語文法を勉強したことがありますか。

はい いいえ

→「はい」と答えた方は、どこで、どれぐらい勉強しましたか。

（例：大学の授業で2年ぐらい）

5 「未然形」<sup>みぜんけい</sup>「連用形」<sup>れんようけい</sup>「終止形」<sup>しゅうしけい</sup>「連体形」<sup>れんたいけい</sup>「已然形」<sup>いぜんけい</sup>「命令形」<sup>めいれいけい</sup>「一段動詞」<sup>いちだんどうし</sup>「五段動詞」<sup>ごだんどうし</sup>  
「サ変動詞」<sup>へんどうし</sup>「カ変動詞」<sup>へんどうし</sup>などの文法用語を知っていますか。

はい いいえ

6 今までに日本の古典文学を読んだことがありますか。（古典にかぎらず、文語で書かれたものであれば何でも）

はい いいえ

→「はい」と答えた方は、どんな作品を読みましたか。

- ・作品名：
- ・翻訳 / 原文
- ・大学の授業で / 自分で

7 このクラスで特にどんなことを勉強したいですか。

8 このクラスで読んでみたい作品がありますか。（平安時代から明治時代ぐらいまで）



表3 履修学生の専攻別構成

年度	歴史学	文学	宗教学	言語学	人類学	東アジア研究	政治国際関係	法律	哲学	社会学	その他	計
02	5	3	1	3	1	2	1	1			1	17 (16)
03	2	7	2	2		1		1	1			16 (13)
04	4	3	2	1	1						2	13 (11)
06	5	6	2	1						1	2	17 (16)
07	6	6	1	1							1	15 (15)
08	3	3		1	1						1	7 (7)
09	13	5	2	1	1		1		1			24 (22)
10	10	4	3	2	1		3					22 (2)
11	5	2	4	1	1							13 (13)
12	4	6	1	1		2	1	1				16 (14)
13	5	2	1			1				1		10 (10)
14	4	2	2		1		2					11 (10)
計	66	49	21	14	7	5	8	3	2	2	7	184 (169)

表4 研究における文語文法の必要性の有無

年度	必要	不要	無回答	合計
02	未調査			
03	5	8		13
04	7	4		11
06	11	4	1	16
07	12	3		15
08	4	3		7
09	19	3		22
10	11	10	1	22
11	8	5		13
12	9	5		14
13	6	4		10
14	5	5		
合計	97	59 (2)		158

表5 文語文法の学習歴

年度	未習	少し	1学期 (3ヶ月)	半年	1年	1年半	2年～	不明	合計
02	8		2	1	4	1			16
03	7	2	1	1	1		1		13
04	8	1	1		1				11
06	8		3		4	1			16
07	9	2			3			1	15
08	3		2	2					7
09	14		4	2			1	1	22
10	14		2		4		2		22
11	6	1	2	1	2	1			13
12	11		1		1		1		14
13	6	1					3		10
14	8	1			1				10
合計	102	8	18	7	21	3	8	2	169

表6 文法用語の既習状況

年度	既習	未習	無回答	合計
02	6	2	8	16
03	11	1	1	13
04	8	3		11
06	9	7		16
07	9	6		15
08	5	2		7
09	9	12	1	22
10	14	8		22
11	9	4		13
12	7	7		14
13	8	2		10
14	3	7		10
合計	98	61	10	169

表7 古典文学学習・読書の経験

年度	有(原文)	有(翻訳)	無	合計
02	7	4	5	16
03	6		7	13
04	5		6	11
06	11		5	16
07	9	1	5	15
08	4	1	2	7
09	9	1	12	22
10	11		11	22
11	8		5	13
12	6	1	7	14
13	3	1	6	10
14	2	2	6	10
合計	81	11	77	169

表8 練習問題の例1 形容詞練習問題

## 形容詞練習問題1

◆現代語にしてみましよう。

1. 楽しき時は、長からず。
2. 明日は寒からむ。(む→だろう)
3. その女、若かりし時、いと美しかりけり。  
(し→過去の助動詞 けり→過去の助動詞)
4. 明日のテストは、むずかしかるべし。(べし→ここでは「～にちがいない」の意味)
5. 若き時は悩み多けれども、楽しきことも多し。
6. おどろくことなかれ。

表9 練習問題の例2 助動詞「き」「けり」練習問題

助動詞「き」「けり」練習

一 文中の「き」「けり」の使い方に注意しながら意味を考えてみましょう。

1. きのみ雨のいたく降りしかば、センターに参らざりき。(いたく→とても)
2. 父の書きし書を読みき。
3. 初めて日本に来し時、友は一人もなかりき。
4. 「かの人、先生なりけり」(かの人→あの人)
5. 「野球を見つつ飲むビールこそおいしかりけれ」
6. 初めて日本で買ひ物せし時、「高かりけり」と思ひき。